◎『すべて神の御霊に導かれる者は、神の子供である。』(ロマ書第８章14節)

新『教会通信』(2024年3月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会
牧師　三崎　　紘
伊東市十足324-37
TEL 0557-45-3692
FAX 0557-45-7081
http://izukogen.wonderful.to

ハレルヤ！

唯一にして天地・萬物の創造主、我らの贖い主なる主イエス・キリスト様の尊き聖名を崇めまして大いなる感謝と讃美をお献げいたします。

主に在りて敬愛する聖徒方へ

過ぐる先月(２月)は、関東地域に於いて摂氏25度を超える夏日を迎えたかと思いきや、その翌日には突如寒波の襲来という奇異な天候の中に在りましたが、皆々様にはお変わりなくご健勝の事と存じます。尚、先月は僕の体調未だ本復を得ず、その他の事情も重なり此の教会通信をお手元にお届けすること適わず誠に申し訳ございませんでした。

何が起こるか判らない昨今でありますが、主イエス様の御憐憫の中に、皆々大いなる御祝福とご指導を賜って前進させて戴きましょう。

◎『我キリストと偕に十字架につけられたり
最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。
今われ肉體に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を
捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。』
(ガラテヤ書第2章20節)

ガラテヤ書は、使徒ペテロ師に神様が啓示なされたお言葉が記載された書であります。故に文中、“我”とはペテロ師ご自身を指しておりますが、現代、彼と同じ**《水と霊》(ヨハネ3:5)**の真のみ救いに与っている私達は、ペテロ師と同じ立場にありますので、私達はキリスト・イエス様と偕に十字架につけられた**(ロマ書第6章6節)**一人びとりであります。

また主イエス様の霊であられます聖霊・御霊様をそれぞれの裡に戴く私達でありますから、**“最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり”**との聖言は、現在の私たち自身が胸を張って朗々と発する事が赦されている聖言でもあります。

即ち、現在の私達は主イエス様と一緒に十字架に掛けられて死んで偕に甦った僕であり諸聖徒方お一人びとりであります。

確かに私達は以前と相も変わらぬ肉体の儘に活きておりますが、上記聖言を信ずる者は、**“我を愛し我が為に己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり”**と、以前とは身も心の裡も全く異にした新しく神の国に生れ国籍を天に有つ者として活かされているのであります。

◎『御前にて潔く瑕なからしめん為に、
世の創の前より我等をキリストの中に選び、
御意のままにキリスト・イエスに由り
愛をもて己が子となさんことを定め給えり。』
（エペソ書第1章4,5節）

唯今、神様を信じ主イエス様に護られ・導かれ祝福の中に生活している者の中には、自らの善行が伴う誇りを心の中に思い浮かべる時もあろうかと思いますが、神様は**“世の創の前よりキリストの中に選び”（エペソ1:4.5)**と仰有っておられます。

“世の創の前”とは、一体何時の時代なのか？　被造物たる我等としては想像を絶する期間でありますが、天地創造の御方で在られる神様であればこその聖言であります。そんな境界線の無い“古”に神様は私たちを選び、更には、**“御意のままにキリスト・イエスに由りて愛をもて己が子となさんことを定め給えり”**、つまりご自身の子供となることを定めた、決定なされたと明言しておられます。

上記聖言を以て、真の神様を信ずる事の出来ない者に向かって此の福音を語ったとしても、直ぐに信じて救われたいと口にする者はいないかも知れませんが、救われた私達には此の聖言はご恩寵とご慈愛に富給う神様ならばこそ、と素直に真心からの感謝が溢れて参ります。

これまでにも幾度か此の通信でも語らされて来た事でありますが、私たちが口にする《信仰》とは、只単に耳にした事・聖書に拝読した事を頭や心の片隅に留めておけば良いとするのでは無く、自らの見聞きした主イエス様の聖言に謙遜の限りを尽くし・心して行動の限りを尽くしてお従いする事であります。

◎『汝ら今より後、異邦人のその心の虚無に任せて歩むが如く歩むな。
彼らは念暗くなりて、其の内なる無知により、
心の頑固によりて神の生命に遠ざかり、恥を知らず、
放縦に凡ての汚穢を行わんとて己を好色に付せり。』
（エペソ書第4章17～19節）

神様に選ばれ神様の御心に適ってその家族の一員となる事が決定し、その為の教育を受けている私達に向かって語られた聖言であります。

今より後は、唯一大能の神様を信じぬばかりか、天地を創造なさった御方に対して一片の畏れすら持たぬ異邦人のように、此の地上での生活に現を抜かすだけの生活者であってはなりません。

彼らは、人間中心の考えにあまりにも偏頗しており、無知と頑固によってアルファにしてオメガなるご存在の神様とは無縁で、振り返る事も無く恥を恥ともせず、自分勝手に凡ての穢れを欲しいままに行動し、その行く先はサタンの惑わしに近付いて行くばかりであります。

◎『されど汝等はかくの如くならん為にキリストを学べるにあらず。
汝らは彼に聞き、彼に在りてイエスにある真理を教えられしならん。』
（エペソ書第4章20,21節）

※『全くその通りであります。
私達は、何時までも唯一大能の神様のご存在さえ求めようともしない人達のように、世俗的な欲望と言える富や権威を求め適えようと、多くの宗教の中からキリスト教に首を突っ込んで、右往左往しているのではありません。主キリスト様の聖言に耳を傾け、彼の御手の中に在って主イエス・キリスト様の真理を学ばせて戴いているのであります。』

“真理”とは一体どんな事でありましょうか？

多くの人々がご存じの通り、舊・新約聖書はかなり分厚い書物であります。その中には、神様ご自身のご性質やご計画、被造物である我ら人類への思い入れと御愛、人類を中心とする全宇宙をも含めた壮大なご計画、それらが事細かに認められているのが聖書であります。

◎『即ち汝ら誘惑の欲の為に亡ぶべき前の動作に属る舊き人を脱ぎすて，
心の霊を新たにし、真理より出づる義と聖とにて、
神に象り造られたる新しき人を著るべきことなり。』
（エペソ書第4章22～24節）

※『先の聖言に続いておりますが、主イエス様が仰有います《信仰》に生きようとする者に対して、“舊き人”を脱ぎ捨てて“新しき人”を著るべきである、と言われます。』

聖書の中で異邦人と言われた我ら日本人には、生来の真のクリスチャンと言われる人は先ず居ないと思われますが、或る程度の年齢に成り**《水と霊》**のみ救いに与って、いきなり神様の子供に相応しい生活が出来るかと言って、容易く成り切れるものではありません。

それまでにすっかり身に付いた習慣による考えや行動の一つ一つにはそれぞれに意味があり、絶ち難い重たいものがあります。

しかし、聖書で語られる肉的な世俗的な、神様の御前には何らの価値も無い劣悪な思考や行為を導く心の中を、古き衣の如くに脱ぎ捨てて仕舞いなさいと言われます。

聖書の福音と記述通りの御救いに与ったとしましても、神様の仰有る聖言の中に全生活を擲って容易く這入っていけるものではありません。

しかし、神様のお立場として、どうしてもそうしなければならないご事情がお有りなのです。

少しく話題が転移いたしますが、ご容赦下さい。

舊・新約聖書を通して神様のご計画の中に、“エホバの日”“ご再臨”“終末の日”等の期日を境に、此の地球上の在り方が一変する事が預言されております。

有りと有らゆる物の創造者であられると同時に、萬物の支配者でもあられる御方は、愛する人類の悪行三昧に期限を切って制裁の日を定めておられます。

人は皆、此の世に誕生し成長して初めて人間としての自我に目覚めますが、生れる前の事も死んだ後の事も誰一人として識る者はおりません。

人類が創造主の御前に在って罪人であると言われても、多くの人は納得出来ないでしょう。神様が何を以てお怒りになっておられるのか判らないでしょうし、判ろうとする人も居ないでしょう。

しかし、御救いに与った後、取り分け神様の《聖霊》を戴いた者には、聖書を拝読いたしますと素直に理解が出来る能力が与えられます。

幾度も語られた事でありますが、神様は人間を創造なされる折、他の多くの被造物には無かった特別な御愛の感情をもって、御自らの像に象ってお造りになられた事が**創世記**の始めに記されております。

しかし、人類の初めであるアダムとエバの夫婦は、神様のご期待に応えられずにサタンの誘惑に乗って罪を犯し、それまで住まっていた平和で穏やかなエデンの園を追われて此の地上に放逐され、以来人間は生きる為の様々な苦労をしなければならない運命を背負う事になります。

エデンの園から地上界に堕とされたアダム夫婦の間に生まれた二人の男の子は、長男が次男を殺すと言う殺人事件を起こし、生き残った長男はアダムの系列から追放されて仕舞います。

その後、アダムに男子が生まれますが、その次第を記します。

◎『アダム百三十歳に及びて
其の像に従い己に象りて子を産み 其の名をセツと名付けり』
（創世記第5章3節）

※『アダムは神様に象られて創られましたが、次に生まれたセツなる人物は、罪を犯したアダムに似た者として此の世に誕生いたします。』

其の後の世界の様子は推して知るべし。

神様は、地上の人類の総てに絶望なされた事でありましょう。

そんなお気持ちの中に在られて、小さな群れであり力も弱く決して義しいと言えないユダヤの民に目を止められ、是を選民となされて、その長い歴史の時代が舊・新約聖書に展開されます。

神様はユダヤ民族に特別な感情、とりわけ強い愛情を注いで取り組まれました。 その事は**新約聖書ヘブル書第11章**を拝読しますと、そんな荒廃した人類の中に在っても、創造主なる神様を信ずる**《信仰に由りて》**神様のご恩寵に与る人物がエノク・ノア・アブラハムなど約二十組が、その短い章文の中にギッシリと記されておりますので、ご参照下さい。

唯今、僕が申し上げたき事は、先に取り上げて参りました、信仰とは“古き人を”脱ぎ去り“新しき人を”著る、との聖言に付いて、その意味する處の如何なる由来があるやを知らしめたいとの思いであります。

詰まる処、“新しき人”を著るとはどう言う事なのか？

神様は人類創造の折、御自らに似た形を人間にあてがわれて、その御愛の大なるを示さ

れました。

しかし時代の流れと共に、想像もしなかった人間の悪行に絶望を繰り返された神様の御思いは如何ばかりであられましたでしょうか？

ヨハネ第一の書第4章を拝読戴ければ“神は愛なり”との真理が充分に理解されると思われますが、その神様の人類への大いなる御愛の基はそんな事で崩壊する事はありませんでした。

天上界に於ける神様の最愛の独児を、人類が積み重ねた罪悪の贖い代つまり生贄として此の地上に遣わされたのであります。

その御方こそが、主イエス・キリスト様であられます。

主イエス様は地上の汚濁に澱む社会の中に身を置いて、天の父なる神様が人間に持てる御愛の御心と将来のご計画に付いて、数々の徴・不思議・奇跡を交えながらお語り下さいました。

天から遣わされた御器としてのキリスト(油注がれた者、救世主の意)様を認めようとしないユダヤ教徒の熾烈な反抗勢力の攻撃にも耐え忍ばれました。

此の薄汚れた社会に在って、どのような些細な事であっても一度も罪を犯した事の無い主イエス様であられましたが、犯罪者の烙印の下、あのお労しい十字架にて落命なされたのであります。

主イエス様の十字架での御業に依って、我ら神様と全く関わりの無かった異邦人にも真の御救いの路が開かれたのであります。

私達、総てのイエス之御霊教会の信徒が主イエス様と共に高々と標榜する**《水と霊》(ヨハネ3:5)**のバプテスマによる御救いであります。

主イエス・キリスト様の聖名に依る正しい全身沈礼と、第三者が見聞き出来る様子**(使徒行伝2章33節)**での異言・霊言が伴う聖霊を戴く受霊であります。

神様は初めの人間アダムを創られた時

◎『ヱホバ神 土の塵を以て人を造り 生 気をその鼻に吹き入れ給えり
人即ち生 霊となりぬ』 (創世記第2章7節)

そう記されております処から、初めの人には神様の霊、即ち聖霊が吹き込まれていた事になります。

神様はその像ばかりでは無く、体内に生 気を吹き込まれた事により、**人即ち生 霊となりぬ**、と為られたのであります。

神様の霊を戴く者は永遠の生命が与えられており、アダムもエバも罪を犯す事が無ければ、エデンの園に永遠に生きる事が出来たのであります。

前述の如く、その後生まれたセツなる人物は、その父である罪人アダムに似た者と為られ、その中には神様の霊であられる御霊様は宿ってはおりませんでした。

“新しい人を著よ”と仰有り、生まれ変わりを説かれておられるのは、新たに神様の霊を受けよ、と言われておられるのであります。

それを裏付ける聖言として、新約聖書の次の文面を開いて下さい。

ヨハネ傳第20章19節～23節でありますが、一週間のはじめの夕方とありますから日曜日

の夕方、お弟子達の前に十字架にお架かりになられて以来始めて、主イエス様がお姿を顕されます。

主イエス様を十字架に架けるように当時の権力者ピラト総督に画策したユダヤ人の過激派集団を恐れて、静かに息を凝らしていたお弟子さんの前に現れた主イエス様は、**“平安なんじらに在れ”**と言われて、更にお弟子さん一人びとりに**『父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』**と仰有り、彼らに息を吹き掛けて言われます。

◎『聖霊をうけよ。なんじら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、
誰の罪を留むるとも其の罪とどめられるべし』
（ヨハネ傳第20章22,23節）

現在、聖霊を頂戴している僕を始めとして聖徒方の中には多分、ハレルヤ、ハレルヤと主を崇めている時に舌がもつれてきて受霊したと思われがちでありますが、実際は上記の聖言の如くに、主イエス様がそれぞれに息を吹き掛けて、聖霊をお与え下さっているのであります。

少しく長くなりましたが、罪深い我らが神様の御救いに与り永世を戴くには、神様の霊魂、即ち神様ご自身とも言えます聖霊様を戴く事が如何に重要であるか、聖書は言葉や箇所を換えて幾重にも知らしめておられます。

人間を愛する神様は、地上の総ての者が**《水と霊》**の御救いに与り永遠の生命を共に生きる将来を希望しておられます。

既に世の中は、聖書の預言の如くに、多くの終末的情景を呈して参りました。

気候の変動による災害も此の先、一体どう成って行くのか？

近年、世界中に起こっている集中豪雨・大洪水・干ばつ・飢饉・自然発火による各地の山火事・大地震・北の国の指導者による核兵器使用を厭わないとの忌まわしい発言・偽キリスト教の横行闊歩・不法の跳梁跋扈により人々の愛が冷ややかになる・イスラエル人の上に起こる諸々の災害的状況など、此れ等の視覚的情景は、**マタイ傳第24章**全体を始めとして、聖書のあらゆる箇所に預言されております。

◎『此等はみな産の苦難の始なり。』　（マタイ傳第24章8節）

主イエス様の空中再臨を始めとする此の世の終末と言う神様のご計画は、現実に今日・明日に起こると言うのでは無いかも知れません。

しかし、次の聖言にも其の日が近付いている事に触れております。

◎『かくのごとく汝らも此等のすべての事を見ば、
人の子すでに近づきて門邊に至るを知れ。』（マタイ傳第24章33節）

『此等のすべての事を見ば』と、視覚的情景が日常的に感得されるように成ったら、人の子・即ち主イエス・キリスト様は、もう既に貴方の家の入り口辺りまで来ておられますよ、と仰有います。

真の**《信仰》**は、一朝一夕で完成されるものではありません。

聖言に触れて、……心に感じて、……**《水と霊》**の御救いに与って、……それで完了で

はありません。

教会に集い、牧師の説教に耳を傾け、聖句の一言一言に目を止め、お祈りを御献げする事からスタートであります。

お祈りを重ねるにつれて神様の御愛の深さに触れ、お祈りが応えられる度ごとに徐々に神様の実在が確信に至り、頑なな心が開かれて参ります。

◎『最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。』

冒頭の聖言を今一度心の内にしっかりと捉えて、見えて来た栄光の日の備えとして、福音を語らせて戴きましょう。是は、《愛》を説かれる神様の我らに対する使命であります。

ハレルヤ！ハレルヤ！　栄光主に在れ！

（２０２４年３月１８日　伊豆イエス之御霊教会　牧師　三崎　紘　文責）